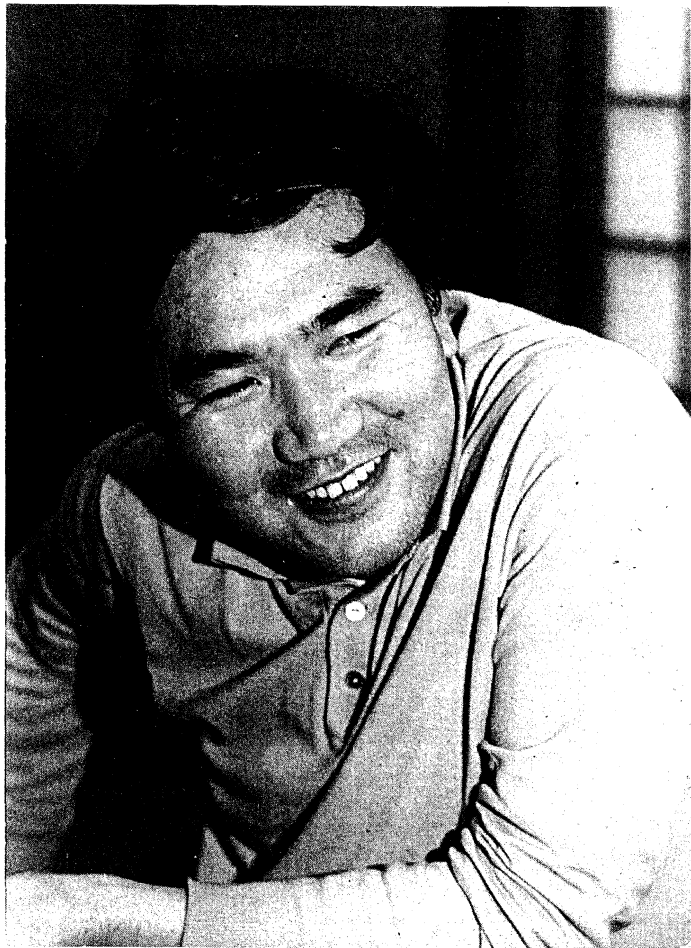


小田 実 —— 文学と運動の狭間に生きた巨人

矢崎泰久(元『話の特集』編集長、ジャーナリスト)。1933年生まれ。65年に『話の特集』を創刊。95年に雑誌休刊後は、反権力、リベラルな姿勢を貫くジャーナリストとして活躍している。



小田 実さん(写真提供:花林舎)

行動する文学

「ステーキ食いに行こ」

電話に出ると直ぐ用件を言う。これはせっかちな小田実の習性だった。それにしても特別嬉しそうな声だった。

当時六本木界隈で一番高級と言われていた『ニュー浜』という店にタクシーで乗りつけた。車の中で茶色の封書用の封筒をポケットから取り出し私に渡した。中味は現金だった。

数えると十万円あった。こんな大金を小田実が持っているのは、これまで見たこともなかった。驚いていると、

「代ゼミの校長がくれたんや。他の講師は契約しとるからボーナス配ったけど、キミには出ない。だから額も少ないけど裏金だから税はかからんと。けたく

そ悪い金だから、めっちゃ高いステーキ食うたる思たんや」

どうして私を誘ったのかわからなかったが、食道楽の小田さんを知っているのは多分私だけだったのかも知れない。二人で有り金全部はたいてイタリアレ스토랑に度々行っていたし、大阪で一夜で三軒「てっちり」のハシゴをし、法善寺横町で「夫婦ぜんざい」を食べたこともあった。

一人前五百グラムの特上ステーキは美味だった。大満足でデザートを食べると、

「そんな隅っこで何密談してるんだい。」冷やかし気味な声が突然頭上から聞こえた。代議士になりたての石原慎太郎だった。きつと彼はこの店の常連だろう。

「嫌なのに会ったな」と小田。「でも、食い終ってから良かった。不味くなるところだ」と私。「ところで慎太郎は『話の特集』の株主やろ。」

「うん、議員になったから返しに行ったら、株主が決めることだ。そろそろ増資しろと叱られた。」

「若い日本をつくる会」でも安保闘争でも小田実と石原慎太郎は一緒だったが、後に石原さんは自民党から参院全国区で立候補してトップ当選を果し、六年後に衆院に鞍替えした。二人はとうに疎遠になっていたが、共に小説家であった。

『週刊現代』に「小田と矢崎がココソコしながらステーキを食わなくなる世の中にしてやりたい」という石原慎太郎のコラムが掲載されたのはバツタリ『ニュー浜』で会った翌週のことだった。窓際の席に移ってデザートを食べていたので、ココソコしているように見えたのかも知れないが、私たちは堂々と店で一番高級なステーキを腹いっぱい食べていただけである。余計なお世話というものだ。

「俺はいつも真ん中の軸に立つてるのにな、どうして左翼呼ばわりされるのかわからん。世の中が右へ行つとるせいや。な、キミもせやろ。」

小田さんの言う通りだった。

ベ平連と『話の特集』は同じ一九六五年に出発した。市民運動と商業雑誌という違いはあったが、自由と

平和を目標としているところは一致していた。共通な仲間も沢山いた。

久野収、鶴見俊輔、小松左京、開高健、小中陽太郎といった方々は、ベ平連に参加していたし『話の特集』の執筆者でもあった。

不定期連載ではあったが、小田実は創刊してすぐに「何でも見てやろう」の座談会パージョン「何でも語ろう」を担当してくれた。必ず出席して全員が似顔絵を描いていた和田誠に、座談会が終了すると、

「さて、和田さん。今日の結論は出ましたか? 感想はいかがですか?」と聞くのが習いだった。一字違いを小田さんも和田さんも面白がって、好物のデリカテッセンのチーズケーキを三人で食べに行ったりもしていた。

まだ給湯があったセントラルアパールの編集室で小田さんは風呂に入った後、徹夜で小説(ヨソの会社の)を書いたりする。

何しろ図体が大きく、身なりには頓着しない人だから、『話の特集』の編集者たちにとっては落着かない。多忙な人でもあるから、滅多に長居はしない

のだが、東京へ来た時にはのべつ編集室に滞在しているように思えた。

極端な猫背で、髪はボサボサ。人間より獣に近い印象だったが、実際は繊細でもあったのである。それは編集者たちへの様々な気配りにも現われていた。自分で湯をわかして茶を入れたり、駄菓子を買ってきて配ったりすることもあった。片時も思索を中止せず、ペンを離さなかった。

小説家への憧憬

小田実は高校二年生の時に『明後日の手記』という小説を書き、中村眞一郎に読んでもらって翌年河出書房から上梓している。まさに早熟そのもので、東大に入学するのはその後だった。

一橋大学の学生だった石原慎太郎が『太陽の季節』で芥川賞を受賞するのは一九五五年だから、小田実にはショックだったに違いない。フルブライト基金を受けてハーバード大学に留学した年に、間なしに大江健三郎が『飼育』で芥川



賞を受賞している。おそらくはさみ撃ちに合ったような気分がしただろう。

見聞を広げたいという気持ちで「何でも見てやろう」として実行に移され、一九六〇年に帰国するまでに、アメリカ、メキシコ、ヨーロッパ、中近東、アジアの各地を旅する。まさに行進するようにガムシヤラに歩き回る姿が目

に浮かんでくる。そして帰国する。しかも、久しぶりの日本は安保闘争の渦中にあつた。

一九六一年二月に『何でも見てやろう』は河出書房から出版され、たちまちベストセラーになる。一人の若者が一日一ドルで旅行する体験記は冒険小説的なドキュメンタリーでもあつた。激しい時代の変化にもマッチした。小田実は一躍スターになったのである。

その心の中には「私は本来小説家だ」という自負があり、同時に『何でも見てやろう』の成功を心から喜べない自分に気づいていた。自伝のホームページの中で、「風穴があいた。これからは小説を書こう」という決意を抱いたと記している。

ベ平連（ベトナムに平和を！市民文化団体連合）は、哲学者の鶴見俊輔、政治学者の高島通敏らが呼びかけて発足するが、代表者として小田実が担ぎ出されて組織として固まる。「来る者は拒まず、去る者は追わず」の自由意志で参加

することを原則としていたので、誰でもメンバーになれたし、何の規約もなかった。

小田実には似合った組織だったのだろう。初代の事務局長はトンカツ屋を営む久保圭之介という一風変わったリベラリストだったが、吉川勇一が代ることによって、行動形態が少しずつ変化し固まって行った。小田と吉川の切っても切れないコンビによって、ベ平連の活動は次第に拡大され活発になる。単に反戦デモをやるだけでなく、いろいろな企画（意見広告など）を立て、世界的にアピールするシステムをあみ出したのだ。

小田実は点であり、吉川勇一の引いた線からなるべくハミ出さないように行動する。そのことによって作家としての仕事も旺盛にやることのできた。二人共代々木ゼミナールという予備校の講師をやっており生活の糧は確保し、ベ平連の運営は市民カンパのみでまかになった。とは言え、吉川さんはのべつ小田さんを探し続けていたような感じはあつた。

思索する、講演する、執筆する、活

動する、議論するといった連鎖の外側で、遊びもこなす。とにかく多忙なのだ。大きな鞆の中には書物、資料、原稿用紙が思いきり投げ込まれている。衣類などはほとんど入っていないから、着たきり雀だったのだろう。整理が悪いからのべつ鞆をひっかき回している。いらいらが伝わってくるような動作ばかりやっていた。

そこへ若者たちが集まってきて、何かしらのアドバイスを求めたり、講演の依頼を伝えたりしている。必死で断っているのだが、何かの拍子に引き受けたりする。手帖のスケジュール表はたちまち真っ黒になった。

ベ平連の発足当時は開高健、小松左京、小中陽太郎らとたこまつていたが、突如姿を消して関西へ行ってしまった。西宮の姉の家に閉じこもって小説を集中的に書いたりする。それでも久野収、鶴見俊輔、桑原武夫といった先輩たちのリクエストにも答えて飛び回らなければならぬ。

そんなわけだから、『話の特集』と関わるのは、彼にとっては息抜きでもあつた。

「かなわんよ」と連発しながらも、結果的には自分で決定したスケジュールをこなす。遊びたくてうずうずしている様子は駄々っ子のようでもあつた。女好きでもあつた。

『反・家庭を語る』という一九七九年『話の特集』十二月号の座談会は、新婚の和田誠も加えて、久野収、吉川勇一、中村とうようというメンバー。小田さんと中村さんは独身でイニシアティブはこの二人が握った。この時小田は諸悪の根源は結婚にあると主張。子供が生まれ家庭を大切にしようになつたら男はたちまち墮落して、ついには遺産を残すという悪しき私有財産制にまつて死ぬことになる」と自説を一步も譲らなかつた。

変化への躊躇

考えたことを行動に移す。それでもできるだけスピーディーに。評論集を出し、長編小説の書籍を出し、講演記録も出した。一年間、どんどん文章を発表し続けた。多忙というより、自分で追い詰めるように活動する。約束を守るの

に手いっぱい小田さんを見ると、私
はつい休養をとらせたくなるのだった。
「時間がないんよ。ちょっと怠けると後
が大変だから……。」

ブツブツ言いながら、一緒にサウナ
へ行き、近頃会ってない仲間の誰かに
声をかける。たいていは焼肉屋だった
が、気の置けない友人とは大声で議論
し、爆発してはばからなかった。陽気
な小田さんは頼もしく見えた。

『話の特集』一九七三年六月号では、
五木寛之VS小田実の「人間を考える」
という対談を久野収さんの司会で二〇
ページ掲載している。二人はライバル
でもなければ作家としての共通性もほ
んどない。しかし、当時の若者たち
から最もリクエストの多いオピニオン
リーダーだった。久野さんは二人に高
い評価を与えていたが、小田さんとは
近かったが、五木さんには特別な印象
を持っていた。



は誰にもヒケを取ることはなかった。
担当編集者なら解読できたが、いきな
り原稿を見た人には、丸く細かい記号
のような文字は判読できなかつただろ
う。私もスラスラ読めるようになるに
は一年ほどかかっている。

個人的な政治スタンスを小田さんが
持っていたかどうか定かではないが、初
当選以来土井たか子さんの応援はして
いた。私も鈴木武樹(故人)と一緒に神
戸の自衛隊基地まで行って応援演説を
したことがある。首長選挙では革新候
補に限ってはいたが、日本全国あちこち
で小田さんと共に応援をしたり集会で
話をしたりしている。ただ理論や思想
としては、小田さんは原理を大切にす

「小田は理屈ばかりでわかりにくい。そ
の点、五木は重要なことをわかりやす
く説き明かす。同じことを言っても違
うように聞こえる」

久野さんは五木さん寄りに話を進め
たために、ついに小田さんが爆発して、
激しいやりとりが戦わされた。

文学についてのスタンスの違いも大
きかった。読者に求めるものは何かで
も、基本的な違いが露呈される。その
過程の中で、小田さんが偏屈のあまり
変革を拒否するという指摘があつて険
悪な空気が流れた。つまり、それほど
真剣勝負だったのである。「語ろう」シ
リーズでは柔軟な小田実が、久野、五
木連合軍に癪癪を起すシーンもあつ
た。原稿をまとめるに際して私は苦勞
したことを覚えている。

思想と政治の亀裂

ベ平連は日本に市民運動を定着させ
るきっかけになったが、政治といかに
対峙するかという課題を小田実に突き
つけることにもなった。結果的には小
田実の思想は政治とどう一線を画する

人だったし、私は時代の流れとか情勢
とかによって行動も違っている。

今でもピースボートの辻元清美を政
治家にしたのは小田実ではなかつたか
と思っている。自分自身は政治家にこ
そならなかつたが、政治へのコミット
は少なくない。アドバイスだけではな
く政策についての提言や意見も積極的
にやっていたようにも思う。

セクトとの関係も多少はあつたが、
日本共産党とは相容れるところはな
かつた。もともとマルクス・レーニンの
影響は受けていないし、政治を学問と
して学んだりもしていない。

したがって厳密に言うると、小田さん
は思想は思想、政治は政治と割切って
いたのかも知れない。のべつ政治には
腹を立ててはいたが……。

「人生の同行者」がいた

小田実にとって玄順恵さんとの出会
いは決定的なものだった。ガラリと変
化したのである。何がどう変つたか
はなく、何から何まで変つた。もしか
すると人格まで変つたのではないか。

かに重きが置かれたのも仕方なかつた。
ベ平連の活動の中でアメリカ脱走兵の
救出に加担し、小田実さん自身がいろ
いろな問題に直面せざるを得なかつた。
どうしても政治に関わらなくては解決
できないこともあつたのである。

次には革自連(革新自由連合)の要
請で自らが政治の表舞台に出るか否か
の決断も迫られたりした。革自連も市
民運動の一環であり、革新政党の支援問
題では深い関係が自然に生じて行つた。

デモ行進をしながら、書きかけの小
説のストーリーを考える。それも、今
自分自身が主張し追求しようとしてい
る問題とは全くかけ離れている登場人
物たちのセリフのあれこれの思い浮か
べたりもするのだから、俺は分裂して
いるんじゃないかと悩んだりもしてい
たのである。同時に手がけている評論
では、これまた幅広く、反戦・平和か
ら人間の生き方に至るまで数多くの著
書を毎年二、三冊の割り合いで上梓して
いたのである。

人間ブルドーザーのようなたくまし
いペンの動きには感心もするが、あの
文字の読みにくさと言つたら、悪筆で
たほどだ。

一九八二年に結婚し、二年後に半年
かけて中国を二人きりで旅している。
最後の一ヶ月は在日の玄さんの祖国で
ある北朝鮮に滞在し、小説『毛沢東』
を書き上げて帰国した。

一九八五年夏から一年半、ドイツ政府
の文化交流基金を受けて、西ベルリンで
暮らす。その間『話の特集』には日録
風な紀行文を連載、のちに『西宮から
日本、世界を見る』(話の特集刊)に収
録された。

ドイツ滞在中に長女ながら誕生。ド
イツ国家はならちゃんに対して国籍を
与え、二十歳までの年金を支給している。
三歳になったならちゃんを連れて、
中山千夏の青山の自宅に三人で遊びに
来た日のことは忘れられない。ほぼ半
日団欒の時を過ごし、日本料理店で共に
食事をした。ならちゃんは私とたちま
ち仲良しになり、その夜別れたくない
と大泣きする。

次にならちゃんに会つたのは、西宮
に小田さん一家を千夏さんと訪ねた時
だった。すき焼をご馳走になり、五歳

のならちゃんじよちゃんが器用に調理してくれたのだった。

一九九五年阪神淡路大震災は、西宮の小田家を直撃する。この顛末は小田さんの論文と活動によって広く知られているが、小田実自身が告白しているように、彼の認識、思考、思想を大きく変化させている。

同時に小説の傾向も大きく変っている。以前に書きかけて放ってあったものを発掘して新作として発表したり、『アボジ』を踏む（講談社刊）では川端康成文学賞を受賞している。創作意欲は二〇〇〇年後にさらに旺盛になり、「いくら書いても間に合わん」と珍しく弱音を吐いたりしていた。

ただ、小田実の小説は売れない。評論はベストセラーになるものもあつたが、何故か小説はあまり読まれないのである。難解だと指摘する評論家は少なくないが、確かに重い。つまり、作者の意図するものが前面に出すぎているという批評もあつた。

小田実ほど著書の多い作家も稀であ



むろん小田実、出席者は岡崎勝（教師）、鎌田慧（ルポライター）、アーサー・ビナード（詩人）、若桑みどり（大学教授）、そして似顔絵の和田誠の六人というメンバーだった。これが共にやつた私との最後の仕事となった。

翌年、小田実さんは胃ガンを発症する。まだまだやりたい仕事、ことに小説の構想を山ほどかかえたスケールの大きい作家は、病いと闘いながら死までのカウントダウンの中でペンを握り続けた。

二〇〇七年七月三〇日、玄順恵さんとならちゃんに見守られながら旅立った。遺作は『生きる術としての哲学』岩波書店刊、『河』（集英社刊）の二冊。

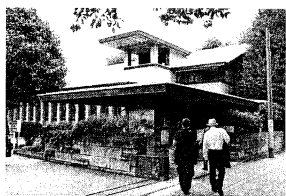
私の記憶の中から代表作を挙げておくと、小説では『大地と星輝く天の子』『ベトナムから遠く離れて』、評論では『日本の知識人』『難死』の思想。

「人間チヨボチヨボや」と口にしながら、世界を闊歩している姿勢の悪い大男がなつかしい。ボチボチ日本も変わらなくちや、ね、小田さん！

る。しかも小説、論文、評論、エッセイと分野も多岐にわたっている。『小田実全仕事』（河出書房新社刊）に次いで『小田実全小説』（第三書館刊）が出版されたがいずれも未完のままに終わっている。話の特集社からも『何でも語ろう』（一九八二年）と『西宮から日本、世界を見る』（一九九三年）の二冊が刊行されているが、雑誌に発表された多くの仕事に分散したままになっている。

二〇〇五年に『話の特集四〇周年記念号』（WAVE出版）では久々に「教育を語る」が掲載されている。司会は

☆九月十七日(土)、「矢崎泰久」あの人がいた」出版ライブ」と銘打った催しが豊島区池袋の自由学園明日館講堂で行なわれた。出版記念パーティではなく、出版ライブという触れ込みなので、本誌の案内などでもご承知のように、李政美・松元ヒロ・鎌田慧らが出演、司会を佐高信と中山千夏が務め、会が盛り上がり会場から中川五郎や趙博が飛び入り参加して歌ってくれるなど、歌あり笑いあり論ありというたいそう賑やかな出版ライブとなった。小生は実行委員の一員として裏方を務めていたのですが、舞台を覗くことはできなかつたが、永六輔・小沢昭一・本多勝一・田原総一郎・福島瑞穂・



吉行和子・富士真奈美さんといった方々からの祝辞の挨拶もいたっていたようだし、会場には歴史学者・色川大吉・元ベ平連事務局長の吉川勇一・同じくベ平連の中樞を担っていた数学者の福富節男さんらもいらしていた。終演後に、知人の一人から一水会の鈴木邦夫さんに紹介されたことにもちよつとびっくりした。また、台風襲来で来られなかつたのだが、沖繩から参加申込みされた方、札幌・秋田・金沢・西宮市など遠方からの参加者や原爆被災地の相馬市から参加された観客のいらしたこともとても嬉しかった。ともあれ、伝説的なりトルマガジン「話の特集」の神話力と、その名物編集長だった矢崎泰久さんの幅広い人間関係の一端が再現されたような、この出版ライブの盛会ぶりにあらためて脱帽した!

☆裏方を務めてくれた矢崎さんと記者仲間だった塚本晃生先輩、矢崎さんの弟さんで日本出版社の矢崎泰夫社長、千夏さんの事務所花林舎社長で、なんと福島瑞穂さんと高校のクラスメートだった

という鈴木敬子さん、週刊金曜日編集部の土井伸一郎さんたち、それに泰久塾の塾生の何人かの方にも大変尽力いただいた。またステージ看板を制作してくれた成田ヒロシさんとスタッフを務めてくれた「街から」の仲間たちにも、あらためて感謝したい!

☆約半年余の準備作業の疲れは多少あったが、「9・19 さようなら原発」集会に参加、久しぶりにデモに加わった。こちらも大盛会だったが、これで安心するわけにはいかない。



(本間健彦)

『街から』第114号

2011年10月10日発行(隔月刊)

●編集発行人 本間健彦

●編集発行
株式会社 街から舎
〒171-0051 東京都豊島区長崎 3-13-15-101
TEL03-6638-6685 FAX03-6638-6684
E-mail machikara@nifty.com

●郵便為替 00140-3-659176 (株)街から舎
定価 350 円 (本体 333 円) 送料 140 円

●街からホームページ
<http://www.machikara.net/>

●スタッフ
小児 窓 / 丸井正子 / 朝倉恵美子 / 本間健彦
●HP 編集 福本直人 / 福本未夏
●協力スタッフ
塚本晃生 / 安住孝史 / 富田好明
●印刷製本 山猫印刷所
●デザイン 朝倉事務所

禁無断転載